

「アジア・キリスト教・多元性」研究会の歩みを振り返って

芦 名 定 道

本研究会の活動は、2002年4月の発足以来、本年で20年目に入った。この20年の歩みを振り返りつつ、今後の活動を展望したい。まず、研究会のホームページに掲載された、「研究会の趣旨」によって——この趣旨は、2015年に新しくされたホームページのものであるが、内容は2002年の会の発足に遡る——、研究会の目的と活動について確認し、それを踏まえて、これからの研究会の活動が展望される。

本研究会が当初より掲げてきた目的は、次の通りであった。

「日本を含めたアジア、とくに東アジアのキリスト教をめぐる諸問題について共同研究を行うことである。とくに、東アジアのキリスト教が共有する宗教的多元性の状況を留意しつつ、この地域における新しいキリスト教形成の可能性を探ってみたい。」

研究会のメンバー構成はこの20年でかなり変化し、研究会の形式的な面（会の名称など）は変更されたものの、研究会の活動は、この目的に沿って、20年間、継続されてきた。これは研究会の活動記録と研究会の電子ジャーナルが示すとおりである。また、日本と東アジアのキリスト教として、とくに、キリシタン時代と近代日本とが焦点となったことも、一貫している。現在の研究会には、この二つの問題領域を専門とする研究者が参加しており、今後の研究会における共同研究は、ここに具体化の可能性があるとと思われる。「研究会の趣旨」では、東アジアのキリスト教史（過去）、東アジアの現在の宗教的状况（現在）、東アジアにおける新しいキリスト教形成（未来）という三つの観点から以上の目的が説明されており、ここにおいても、この三つの観点から研究会を展望してみよう。

まず、「東アジアのキリスト教史（過去）」については、次のように述べられている。

「この150年の間にキリスト教がどのような道をたどって現在に至ったのかについての知識は、この地域のキリスト教を論じる前提に属している。これには、通史的な概観から始まって、個々の思想家の研究や個別的な教派・教会や組織・運動体の歴史の分析が

含まれる。また、キリスト教史の理解は、この地域の近代史の文脈の中で、政治史や文化史との密接な連関を視野に入れる必要がある。この点で、本研究会は、日本思想史や日本近代史とも隣接することになる。この会では、こうした現在の問題状況の把握と、基本的な資料収集を行いたい。そのためには、隣接した研究会や研究者との連携が必要になる。」

この「東アジアのキリスト教史（過去）」は、この研究会の活動において、かなりのレベルで実現することができたと言えよう。しかし、「東アジアの現在の宗教的状況（現在）」と「東アジアにおける新しいキリスト教形成（未来）」についてはどうだろうか。

宗教的多元性によって特徴付けられた現在の東アジアのキリスト教（宗教的状況）は、キリスト教と諸宗教との相互交流（対立と対話）について分析することが必要であり、「分析の方法としては、文献資料を基礎にしつつも、一定程度のフィールドワークが必要になる」。こうした研究も、本研究会では不十分ではあるが、ある程度は遂行されてきたと言えるかもしれない。しかし、第三の「東アジアにおける新しいキリスト教形成（未来）」については、それに繋がる研究はまだ明確な仕方で実施するには至っていないと言わざるを得ないだろう。

「新しい文化状況における現実化（文化内開花）を捉える理論構築」は実現の手がかりを模索する段階であり、「東アジアのキリスト教の過去と現在についての精密な研究に立って、こうした理論形成に寄与する」という目標は、今後の研究会の課題とされねばならない。

以上より、今後の研究会の活動について、若干の展望を指摘してみよう。

1. これまでの活動の継続とさらなる活性化

これまで本研究会において発表された研究は、個人のものも共同のものも、かなりの研究水準において行われてきた。今後もこうした高い水準の研究を継続するのは当然であるが、さらなる研究の活性化をめざすことを忘れてはならない——たとえば、パネル企画の実施や論集の刊行、科研費への応募などが考えられるだろう——。また、そのためには、現在の研究会のジャーナルに、部分的に、論文査読の制度を導入することが検討されてもよいであろう。つまり、これまでのかなり自由な形式での論文と査読付き論文の二つを選択可能にするということであり、それには査読体制の整備が必要である。

2. Afterコロナ、あるいはWithコロナ

この一年余りの新型コロナウイルスの感染拡大は、従来は普通だった対面での研究会の実

施を困難にし、研究会は現在、オンラインで行われている。では、現在のコロナ感染状況が緩和され、一定の対面での研究会が可能になった時点で、どのような研究会の形態が考えられるであろうか。おそらくは、オンラインでの研究会の長所を生かす形で、場合に応じた研究会の形態の選択が望ましいのではないだろうか。海外のあるいは日本国内でも遠方の研究者の参加が容易であることは、オンライン研究会の優れた長所であり、Afterコロナであっても、ぜひこの利点は生かして行きたいと思う。また、東アジアの諸地域のフィールド調査と文献研究を組み合わせた共同研究の実施など、Afterコロナを見据えて研究会の活動を活性化する準備を今から進めて行きたい。

3. 東アジアにおける宗教の将来的な展開への寄与

大学などの研究組織や大きな学会とは異なり、本研究会のように小さな研究集団が東アジアの宗教状況に対してできることには当然限りがある。しかし、問題意識を継続的に展開するという点で、小研究会には大学や学会とは異なる可能性があるのではないだろうか。本研究会には、キリスト教伝来後のキリシタン時代と、キリスト教再伝来後の明治・大正時代について、かなりの研究の蓄積が存在している。それらの過去の動向から、さらに現在、そして未来を展望することは決して無意味でも不可能でもない。必要なのは、たとえば、国家と宗教との関係をめぐる理論的な洞察であり、歴史研究から思想研究・理論構築へと共同研究を広げ深めることである。これは、本研究会にとっては未知の研究領域であるが、挑戦に値する試みとなるのではないだろうか。

(あしな・さだみち 京都大学大学院教授)